

国際教育研究フォーラム

第 102 号

2024年 9月

国際教育研究所

目次		頁
SDGsはどこまで達成できるのか	小山 悦司	1
国際化推進に向けた留学生別科の取り組み	宮口 徹也	2 ~ 7
国連世界観光機構「TedQual 認証」を取得してみよう	牧 一郎	8 ~ 12
編集後記		12

SDGs はどこまで達成できるのか

国際教育研究所 所長 小山 悦司

SDGs は国連加盟国が 2030 年までの達成を目指す目標を示しており、「誰一人取り残さない」を共通理念にしている。SDGs の進捗状況を評価した『持続可能な開発報告 2024 (Sustainable Development Report 2024)』(2024/6/17)によれば、達成度 1 位はフィンランドで 4 年連続のトップ。上位は環境先進国と呼ばれる欧州諸国が占め、米国は 46 位、中国は 68 位となった。日本の SDGs 達成度は 167 か国中 18 位と健闘しているものの、17 の目標のうちジェンダー平等や気候変動対策など 5 つの目標が前年に続いて「最低評価」であった。

SDGs は 2016~2030 年の 15 年間を対象とし、2024 年は後半スタートの年にあたる。このタイミングで出された国連『持続可能な開発目標報告 2024 (Sustainable Development Goals Report 2024)』(2024/6/28)では、「SDGs のターゲット (17 目標の下にある 169 の小目標)のうち、順調に進んでいるのは、わずか 17%。3 分の 1 以上は進捗が停滞または後退している」と厳しい現状に警鐘を鳴らしている。SDGs は、どこまで達成できるのだろうか。

日本の達成状況で特に注目すべきは、SDG4 (教育目標)「質の高い教育をみんなに」が前年まで最高評価の「達成済み」であったにもかかわらず、「課題を残す」に評価が下がったことである。このことは、日本における SDG4 の達成に向けた取り組みが後退しつつあることを示しており、強い危機感を抱かざるを得ない。

例えば学校教育の質に関しては、「質の高い初等教育及び中等教育の修了」(SDG4.1)が掲げられている。しかしながら、文部科学省の 2022 年度調査によれば、不登校児童生徒数は約 29 万 9 千件、いじめの認知件数は約 68 万 2 千件、暴力行為の発生件数は約 9 万 5 千件といずれも過去最多となり、教員不足も加わり問題状況は益々悪化する傾向にある。

そこで、SDG4 のみならず 17 すべての目標達成の切り札となるのが、日本の提唱した ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育)である。ESD は、SDGs の担い手を育成するための教育として「教育を通して SDGs 達成に貢献する」(SDG4.7)に明確に位置付けられ、世界 182 の国・地域で 12,000 校以上のユネスコスクールを推進拠点としている。ESD の充実と発展こそが SDGs 達成の鍵を握るといっても過言ではない。

国際化推進に向けた留学生別科の取り組み

ーエコナイトの活動報告を中心にー

岡山理科大学留学生別科 宮口徹也

1. はじめに

グローバル化が進む中、地域の国際化の拠点として大学の果たすべき社会的役割も大きくなってきている。「国際化の推進」は、岡山理科大学の掲げる『第Ⅱ期アクションプラン（中期目標・中期計画）2022-2026』においても大学ビジョンの7つの柱の一つとして挙げられており、これまでもキャンパス及び地域の国際性の涵養に向け、大学内外で様々な取り組みが行われてきたところである。同アクションプランでは「留学生および留学生別科生に対する日本語教育や体験学習を充実させることにより、海外からの留学生の受け入れを強化する」（p.6）ことを中期計画の一つとして挙げているが、このための具体的な取り組みとして『令和6年度事業計画』では「①日本と関連したキャリア形成を促す説明会、②体験的プログラム、③理数系リカレント授業」（p.21）の3つを留学生に対して実施することを計画している。本稿では、このうち「体験的プログラム」の一環として実施した2024年度「エコナイト」における別科生の学内外の活動について、その内容と成果を国際化の観点からまとめ報告する。

2. 「エコナイト」とは

「エコナイト」とは、「エコロジー」をテーマに大学コンソーシアム岡山が毎年7月の七夕の時期に合わせ実施している大学協賛型のイベントである。エコナイトでは、コンソーシアムに加盟する岡山県内の大学が各々のキャンパスでエコに関連したイベントを行うほか、岡山市北区の奉還町商店街で各大学が出展する形で共同イベントも実施している。岡山理科大学（岡山キャンパス）においても、省エネを呼びかけるイベント「七夕エコナイト」（以下、理大エコナイト）を毎年7月の第1水曜日に開催しており、学生の企画による展示や屋台、ステージ発表といった出し物が行われている。エコナイトでは「クールビズ」の観点から浴衣を着ての来場も推奨されており、多くの学生、教職員が浴衣で学内を歩く姿が見られるのも本イベントの風物詩となっている。別科生も参加した2024年度の理大エコナイトは、梅雨の中、晴天にも恵まれ、例年以上に多くの来場者があった。

3. 理大エコナイトでの留学生別科の活動

これまで学内のエコナイトには一般客として参加する以外、別科としての活動はしていな

かったが、国際化推進の動きに合わせ、別科生のことをより多くの人に知ってもらい、学内の国際化の意識を高めようと、2023年度から別科として企画にも参加するようになった。2023年度エコナイトでは、ポスター展示を行い、別科生が国の食事、文化、名所などを紹介するポスターを制作、発表したほか、日本人学生を対象に別科生の国の民族衣装を試着してもらう体験企画などを行った。これらの企画はいずれも好評だったことから、2024年度エコナイトにおいてもポスター展示と民族衣装体験を再度実施することとした。また、2024年度は、より多くの人と交流を図ることを目的に、共通企画の「デジタル・スタンプラリー」とステージイベントへの参加も併せて行うこととした。以下では、別科の授業内で実施したポスターとスタンプの制作過程と、当日の活動の様子をまとめる。

3.1 スタンプとポスターの制作

2023年度のポスターでは別科生の出身国を紹介するだけだったが、2024年度はエコナイトの趣旨に合わせ、国の紹介に加え、別科生の出身国を含めた世界のSDGs事情について紹介するポスターも制作することとした。スタンプとポスターの制作は別科生全員が履修する「別科セミナー」の時間を利用し、6月上旬から約4週分を制作に当てた。制作にあたって初めにイベントの趣旨を説明したが、まだ来日して間もない別科生の中には「七夕」が何か知らない、「SDGs」という言葉も初めて耳にするという学生も少なくなかった。そこで制作前に一度、七夕の物語や七夕飾り、SDGsについて簡単な解説を行い、エコナイトの活動の意義を意識してもらうようにした。

大まかな趣旨が理解できたところで、別科生一人ひとりに「七夕」「留学生別科」をテーマに、「デジタル・スタンプラリー」のスタンプデザインを考えてもらった。デジタル・スタンプラリーは、各ブースに設置されたQRコードからスマホでスタンプを集めてもらうことで、より多くの展示を見て回ってもらおうという共通企画である。別科のスタンプは、別科生にデザインを募った後に投票で決定することとした。デザインは計21種類集まったが、七夕の物語や飾りに着想を得たもの、鳥居など日本的な要素を取り入れたもの、教育機関のロゴをイメージしたものなど、留学生ならではの工夫を凝らしたデザインが数多く見られた。以下にその一部を紹介する。



図1 スタンプ案A



図2 スタンプ案B



図3 スタンプ案C

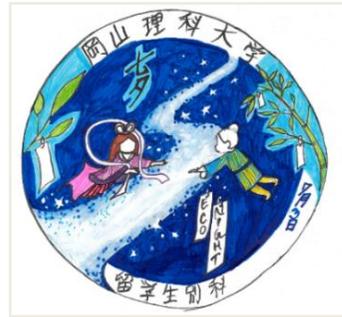


図4 スタンプ案D

投票の結果、図4のスタンプが選ばれ、当日のスタンプラリーでも実際に使用された。

ポスター制作では、国を紹介するポスターを作成する2班と、世界のSDGs事情のポスターを作成する2班に分かれ、各班1枚、計4枚のポスターを制作した。2024年度の別科には、スリランカ、ネパール、バングラデシュ、中国の4カ国の学生が在籍しているが、ポスター制作では各国の学生が分散するようグループ分けの際に調整を行った。スリランカの学生については数が多かったことから、1つの班をスリランカのグループとし、同国のみを紹介するポスターを作ってもらったこととした。以下は実際の制作の様子である。



図5 ポスター制作の様子1



図6 ポスター制作の様子2

ポスターのデザインは学生に任せ、日本語表現や文字の見やすさなどは適宜アドバイスしながら制作を進めた。制作途中の数回は、ボランティアの学部の日本人学生や留学生も招き、別科生のサポートとして制作に加わってもらった。制作中は、日本人を含め異なる国同士での作業が多かったこともあり、別科生は日本語でのやり取りにやや苦勞しているようだったが、英語や共通言語のヒンディ語を使うなど、学生なりに協働を図ろうとする様子も見受けられた。

スタンプと同様に、完成したポスターもデザインに様々工夫が見られた。スリランカを紹介するポスターでは、セイロン島のイラストを中心に置き、周りに国の説明を書く、世界のSDGsを紹介するポスターでは、ポスター自体を地球に見立て、各国の地図を貼り付

け、その国の取り組みを書くなど、各々創意工夫を凝らしていた。制作後は、来場者にポスターの内容を説明できるよう、事前に発表練習をするなど、当日に向けた準備も行った。ポスターはエコナイトの前の週に会場に掲示し、できるだけ多くの人に目に触れるようにした。



図7 掲示したポスター

3.2 エコナイト当日の様子

エコナイトの当日は、別科生の多くが民族衣装を着て参加したこともあり、日本人学生からも声を掛けられるなど、注目を集めていた。別科生は、普段は日本人学生と話す機会が少ないせいか、やや困惑しながらも、同世代との交流を楽しんでいるようであった。日本人学生も、簡単な英単語を交えて話すなど、日本語がまだうまく話せない別科生とも積極的にコミュニケーションを図ろうとしていた。

当日の計画では、2023年度と同様に民族衣装ブース、ポスターの担当に分かれて来場者の対応をする予定だったが、実際には別科生の出演するステージイベントのスタンバイや出演に予想以上に時間を取られ、ステージ周辺でほとんどの時間を費やすことになった。一方で、ステージでのパフォーマンスは好評で、別科生が国の音楽に合わせ、練習してきた歌や踊りを披露した際にはステージ前は多くの観客で賑わっていた。また、別科生の一人はクラシックギター部と共同で日本の歌謡曲も披露し、観客と一緒に歌うなど会場を沸かせていた。当日は計画通りには行かなかったものの、会場は留学生と日本人と、国際的で活気ある雰囲気に包まれ、別科生も普段できない体験を楽しんでいた。



図8 歌を披露するスリランカの別科生



図9 歌と踊りを披露するネパールの別科生



図 10 会場での記念撮影

4. 奉還町商店街のエコナイトへの参加

2024年度は、学外での体験学習も兼ねて、一般客としてではあるが、奉還町商店街のエコナイト共同イベントにも別科生数名とともに参加することにした。イベントには各大学のブースが出ており、別科生も理大ブースに出向き、担当の日本人学生や教員と交流した。ステージでは、大学生による楽器の演奏、歌やダンスの披露があり、地元の「うらじゃ踊り」が披露された際には、別科生も一緒に踊るなど盛り上がっていた。この日は、商店街で定期的に行われている「土曜夜市」と同時開催だったこともあり、会場には多くの人出があった。初めて見る日本の祭りは別科生の目にも珍しく映っていたようだった。

当日は、商店街にある地元ラジオ局（ゆめのたね放送局岡山スタジオ）の協力のもと、別科生がラジオ収録を体験する機会も得ることができた。ラジオ局では、実際の番組でパーソナリティーを務める局員に収録の流れを説明してもらった後、2つのグループに分かれて公開スタジオに入り、それぞれ6分ほどラジオ番組の収録を体験した。収録で別科生は、名前と出身地、将来の夢、ラジオ収録体験の感想などを聞かれたが、別科生ははにかみながらも、日本語で自分の思いを伝えることができていた。収録中の音声は、実際にスタジオの外のスピーカーからも流され、イベントに訪れた来場者の中には、足を止めて収録の様子を見る姿もあった。別科生は、本物のスタジオに入って収録したことはもちろん、少し緊張しつつも学外で一般の日本人と話せたことを新鮮に感じているようだった。



図 11 ラジオ収録体験の様子



図 12 収録後の記念撮影

おわりに

今回のエコナイトでの活動は、アクションプランに基づく計画の一環として行ったものだったが、別科生の存在をより多くの人に周知できた点、大学の内外で広く国際交流の機会が得られた点で、国際化推進という意味では収穫があったのではないかと考える。一方で、国際化が大学のビジョンとして掲げられる中、国際化の意識、留学生に対する理解が学内で十分に醸成されているかと言えば、学生、教職員を含め、まだそうとも言い切れない現実もある。この意味で、学内に付設された留学生教育機関として、別科が国際化推進において果たすべき役割は大きく、今後、別科生が学内外の国際化に寄与できる余地も多分にあると考える。今回の活動のように、大学内外のイベントに参画し、日本人や他の留学生と体験学習を行うことは、別科生にとって、生きた日本語を見聞きし、使う機会になり得るというだけではなく、多くの人と関わり協働する中で、別科生自身も大学、地域のコミュニティの一員としての意識を持つ一助となるものでもあるだろう。こうした小さな取り組みの積み重ねを通して、別科生自らが学部の教員、学生をはじめとするより多くの日本人と繋がっていくための後押しができれば、大学がビジョンとする国際化にも貢献できるのではないだろうか。別科としては、そうした橋渡しができるよう、今回の反省を踏まえつつ、今後も別科生の体験的プログラムの充実を図っていきたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、「ゆめのたね放送局岡山スタジオ」の皆様には写真掲載をご快諾いただきました。改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

岡山理科大学 (2022) 「第Ⅱ期アクションプラン (中期目標・中期計画) 2022-2026」

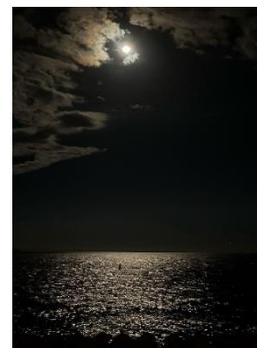
<<https://www.ous.ac.jp/common/files//651/202204120957280712366.pdf>>

岡山理科大学 (2024) 「令和6年度事業計画」

<<https://www.ous.ac.jp/common/files//95/202407031221290904648.pdf>>

中秋の名月

(9月17日に T.A.が鳴門にて撮影)



国連世界観光機構「TedQual 認証」を取得してみよう

九州産業大学地域共創学部観光学科

TedQual 委員会委員長

教授 牧 一郎

はじめに

筆者は長年にわたり、大学や専門学校において教員として観光人材の育成に従事してきた。特に、観光およびホテルマネジメントを中心としたホスピタリティ分野において教育・研究を行っており、以前から国連世界観光機構の「TedQual」には興味があり観光学を教える者として取得したいと考えていた。ここでは本学の観光学科の教育プログラムを更に成長させるために本学科が「TedQual 認証」を取得するためにおこなったプロセスについて報告する。

観光教育プログラムを提供する本学科は、教育施設、観光学科の体制、教育目的、教員の質、履修科目の妥当性などの教育の質を保証し、さらに観光教育の国際的な水準を目指す教育機関として成長・発展を続けるために、国連世界観光機構（UNWTO）の審査を受けることは重要と考えている。国際的にも評価される大学の観光学科を目指すためにも、本学科にとってこの認証は価値があり、今回の取得に至った。

TedQual（Tourism Education Quality）は観光分野における世界最大の国際機関である国連世界観光機関（UNWTO）の関連教育機関である UNWTO Academy（本部：スペイン）が審査を実施し、観光分野における教育機関の教育プログラムの内容について検証を行うものである。TedQual は、観光教育機関に対し観光教育の質を保証し、「観光学の教育と研究およびトレーニングプログラムの質向上」を目的とした国際認証制度である。

欧州最古のイタリアのボローニャ大学や米国のニューヨーク大学、ハワイ大学マノア校などの国際的にも観光学で著名な大学がこの認証を受けている。日本では、和歌山大学観光学部、立命館アジア太平洋大学、大阪観光大学、専門学校では中村国際ホテル専門学校が認証を受けている。世界的にはヨーロッパやアジア太平洋を中心とした 100 校近くの大学が認証されている。

審査は書類審査、TedQual 本部からの監査官による現地監査、教員へのインタビューや経歴など、多岐にわたる項目が審査される。審査は申し込みから認証までに約 1 年半程度が必要とされる長い時間を要するものである。審査後の TedQual 認証は 1 年から 4 年の間で有効であり、その後は延長のための再審査を受けながら、観光の教育機関（大学）として改善を図り、目標に掲げた教育機関へと成長するための改革を進めていくことになる。

政府は 2030 年までに 6000 万人のインバウンド（訪日外国人）観光客誘致を目標に掲げ、日本各地においてホテルや観光名所の開発・整備を積極的に推進している。また、訪日外国人旅行消費額 15 兆円を目指している。しかしながら、最も重要な観光人材の育成は未だ十分に進展しておらず、15 兆円規模の受け入れを行うための有能な観光人材の質および数が不足しているのが現状である。観光学に関する研究は積極的に行われているものの、依然として発展途上の部分が多く、その確かな教育基盤も未だ確立されていない。本学の観光学科は、地域共創学部の一学科として 2018 年に設置された。その目的は、地方創生の起爆剤となる観光産業の発展を担う観光人材を育成することである。

観光人材の育成は、観光産業の持続可能な発展に不可欠である。観光産業は、地域経済の活性化や文化交流の促進に寄与する重要な産業であり、その発展には高度な専門知識と技能を持つ人材が求められる。しかし、日本における観光人材の育成は、教育機関の体制やカリキュラムの整備が不十分であるため、質の高い人材の輩出が喫緊の課題となっている。

本学の観光学科においても、観光産業の多様なニーズに対応できる人材を育成するため、実践的な教育プログラムを提供している。具体的には、観光地の開発・運営に関する知識や技能を習得するための講義や実習、国内外の観光地でのフィールドワーク、観光有給インターンシップなどを通じて、学生の実践力を養成している。また、海外の大学との提携により、国際的な視野を持つ人材の育成にも力を入れている。さらに、観光学科の教員は、観光学の最新の研究成果を教育に反映させることで、学生に対して高度な専門知識を提供している。教員の質の向上を図るため、定期的な研修や研究活動を推進し、観光教育の質の保証に努めるなど観光学科として様々な教育の質の向上への挑戦を続けている。

1. TedQual 審査について

先述したように観光分野における教育プログラムの認証プロセスは、複数の段階を経て審査される。まず、認証のための申請が行われ、その後、各段階での審査結果に基づいて進行される。審査項目は 5 つの項目に分けられ、学校情報、学生情報、授業カリキュラム、教員、マネジメントがキーワードとなり、それぞれについて資料を作成し提出しなければならない。認証プロセスは TedQual 本部への申請から始まり、自己評価申請資料の作成および本審査書類の提出など、各段階の審査に合格することが必要とされる。各段階の審査を通過した後、最終的に現地での実地監査が実施される。実地監査は、監査官による約 5 日間程度の現地での検証および教育関係者へのインタビューなど、多岐にわたる監査が行われる。

このように、教育機関が TedQual 認証を取得するためには、厳格なプロセスを経る必要がある。認証取得までには約 12 ヶ月間が必要とされる。その期間に、教育内容や教授法、学生ニーズへの対応、産業界ニーズへの対応、教育機関としての財務状況などを中心としたマネジメント、世界観光倫理憲章への対応など 20 項目以上から構成される審査のための書類

を作成しなければいけない。以下のプロセスを参考にされたい。

・TedQual 申請リクエスト→自己申請評価（仮審査）→仮審査結果通知→本審査書類提出→本審査結果通知→実地監査→認証取得通知となる。このように、観光教育プログラムの認証プロセスは多岐にわたり、厳格な審査を経て進められる。

2. TedQual 取得のメリットについて

TedQual 取得の利点は多岐にわたるが、特に次の5つが挙げられる。第1に本学科の観光教育・研究プログラムが国際的な基準に適合していることが公認される点である。この認証は、観光学科の教員および学生にとって名誉であり、誇りとなるものである。第2に認証を受けた教育機関は校内に TedQual 委員会を設置し、カリキュラムの継続的な改善と向上を図ることが求められる。これにより、観光教育機関としての成長と発展が行われる。第3に、学内基盤の強化とグローバル化の推進が挙げられる。TedQual 認証校間での教員および学生の交流を通じて、国際的な視野で観光を学ぶ機会が提供される。グローバル化が進む現代において、最新の情報やトレンドを学び続けることは、学生のみならず教員にとっても重要であり貴重な経験となる。第4に産学連携である。国内産業界をはじめ公的機関との連携機会の拡大であり、TedQual 本部の紹介による国際企業との共同研究などが可能になる。これは観光を舞台とし学ぶ学生たちにとっても大きな自信の養成につながる。そして第5に国連が提唱する世界倫理憲章への理解と学びそして実践である。「なぜ世界が観光を振興し発展させなければいけないか」を問うものであり、世界レベルで観光という大きな課題に取り組みながら観光人材として成長できるきっかけを与えてくれるものである。

このように、TedQual 認証取得は、観光教育プログラムの質を保証し、教育機関として国際的な水準を目指すための重要なステップであるといえる。

3. 本学の TedQual 取得までの流れ

本学科の TedQual 委員会は 2022 年 12 月に設立され、2024 年 5 月に認証を取得するまでの 18 ヶ月間にわたり、様々な課題に直面した。2022 年は新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の影響が続いており、TedQual 本部が所在するスペインでも活動が制限された。そのため、通常の社会活動が再開することを期待しつつ、認証申請を行ったが、コロナ禍においても TedQual 認証が行われるかどうか不安であった。数ヶ月後、審査開始の連絡を受け、資料作成に多くの時間を費やした。本学の委員会は 5 人の教員で構成され、膨大な量の資料を作成した。資料はすべて英語で作成され、翻訳作業や本学の歴史、カリキュラム、教員の論文内容、経営状況などを調査する日々が続いた。コロナ禍の影響で実地監査の対面が不可能となりオンライン形式の監査に変更された。2023 年 11 月に学内案内のためテレビカメラを導入し、その準備に追われた。実地監査はオンラインで行われ、監査官とのコミュニケーション

ンには困難が伴った。通訳の手配にも時間を要し、オンライン実地監査は5日間にわたり、午後3時から夜8時までの5時間、計25時間を超えるものであった。実地監査終了後、いくつかの補足資料が監査員より提出を求められ、最終資料を2023年12月末に本部へ送付した。その後、TedQual本部で資料の精査が行われ、最終的な審査結果が知らされたのは今年の5月末であった。

4. まとめ

国連世界観光機構（UNWTO）の複雑なプロセスと厳格な審査を経て、TedQual 認証を取得することができた。この経験は非常に貴重であり、私たちにとって大きな学びとなった。TedQual 校として認証されたことは、我々にとってこの上ない名誉であり、今後の本学の観光学科の進むべき道を示してくれるものである。

今後も数年に一度の延長のための改善資料を提出し続けることになるが、TedQual 校として国連が提唱する世界観光倫理憲章の理念を基盤に、観光教育の教育機関としてさらなる発展を遂げるために、TedQual 認証で得た国際的ネットワークを活用しながら、研究・教育活動を推進していきたいと考えている。以下は本学のHPにTedQual 認証取得のニュース掲載したときのものである。

国連世界観光機構（UNWTO）の観光教育国際認証「TedQual認証」を取得

2024.6.1

いいね! シェアする ポスト

この度、九州産業大学地域共創学部観光学科が、国内では4年制大学として4校目となるTedQual 認証※を取得しました。観光分野において権威ある認証を取得できたことは、これまでの本学の着実な取り組みが世界標準で評価されてきた証です。

昨年度は、文部科学省と観光庁のリカレント事業に本学観光人材育成プログラムが採択され、多くの社会人の方に受講いただき、観光産業の発展に貢献することができました。今年度も8月末から11月にかけて、社会人向けの「観光地経営リーダー育成プログラム」を実施予定です。“産学一如”を建学の理想とする本学にとって、この取り組みは非常に意義深いものです。

さらに、2021年から2030年までの中期計画で“文理芸融合のグローバル総合大学へ”をスローガンに掲げ、学問横断的な教育研究とグローバル人材の育成に向けた取り組みを加速する本学にとって、今回、国連世界観光機関（UNWTO）から認証を得られたことは、大変価値のあることです。この認証取得により、本認証を受けている世界の111大学と肩を並べ、観光教育・研究のグローバルネットワーク（交換プログラム、共同研究、国際学会等）へのさらなる参加や、UNWTO Academyとの共同プログラムの実現が可能となりました。

大学の使命は教育と研究を通じて広く社会に貢献することにあります。本学は地域や産業と密接に関わる大学として、地域社会とのつながりをさらに強化していきたいと考えています。これから、アジア・太平洋地域を主軸とした観光学の教育と研究をリードする教育機関の一つとして、世界標準の観光分野プログラムを通じて九州各地との連携を深めつつ、教育研究の質を一層向上させ、国内外での評価を高めていきたいと考えています。

本認証取得に際し、地域の皆様および関係者の皆様には、多大なるご支援を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。今後とも、本学へのご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

2024年6月1日
九州産業大学
学長 北島 己佐吉

※TedQual (Tourism Education Quality) :国連世界観光機構 (UNWTO) の関連機関であるUNWTO ACADEMY (本部:スペイン) が実施する、観光教育機関に対する国際認証制度

出所 : 九州産業大学ホームページ https://www.kyusan-u.ac.jp/news/ksu_0601/より抜粋

参考文献等

観光庁. (2023). 「令和5年度観光白書」

立命館アジア太平洋大学ホームページ : <https://www.apu.ac.jp/home/news/article/?storyid=3272>

TedQual ホームページ : <https://www.unwto.org/unwto-tedqual-certification-system>

【編集後記】

「国際教育研究フォーラム」第102号では小山悦司所長、宮口徹也氏、牧一郎氏の3編のエッセイを掲載しました。小山所長は国連で2015年に採択され、2030年を到達目標とするSDGsの現状と、近年停滞気味であることを示し、その停滞の切り札として我が国が提唱したESDが重要になると述べています。宮口氏は岡山理科大学留学生別科生が国際化推進に向けた取り組みの一つであるエコナイトに参画した活動を紹介する中で、大学における別科の意義及びエコナイトが別科生の日本語体験学習、地域住民とも協働に大いに役立ったことを述べています。また牧氏は自分が所属する観光学科が観光教育プログラムを更に成長させるために、国連世界観光機構の「TedQual認証」を取得した過程を示し、それにより獲得できた国際的ネットワークを活用しながら、さらに学生・教員が教育・研究活動を推進していきたいと述べています。

今回掲載しました3編は内容が全く異なりますが、読み応えのあるものになっています。その意味で、3編とも興味を持って読んで頂けるものと確信しています。(T.A.)

編集・発行：国際教育研究所
〒710-0821 倉敷市川西町11-30
加計国際学術交流センター内
TEL (086) 423-1611(代)
URL : <https://www.kake.ac.jp/iie/>
e-mail : iie@edu.kake.ac.jp